

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	原 範幸
2. 審査委員	主 査：（岡山大学 教授）青木多寿子 副主査：（岡山大学 教授）寺澤 孝文 委 員：（上越教育大学 教授）越 良子 委 員：（滋賀大学 教授）渡部 雅之 委 員：（鳴門教育大学 教授）久我 直人
3. 論文題目 勤務回数が少ないスクールカウンセラーがチーム学校の一員となる要因に関する研究 —プランニングシートを使った実践を通して—	
4. 審査結果の要旨 学校教育実践学専攻 学校教育方法連合講座 原 範幸 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和6年2月18日（日） 13時10分～15時15分 形式：Zoomによるオンライン形式 1. 学位論文の構成と概要 本論文は、以下に示す4章10節で構成されている。 第1章 問題と目的 第1節 勤務回数が少ないスクールカウンセラーの出現 第2節 チーム学校 第3節 本研究の目的と概要 第2章 プランニングシート（研究1） 第1節 プランニングシート（試作版）の作成 第2節 全国のガイドラインの検討 第3節 プランニングシートの完成 第3章 心理学の理論を用いた事例の分析（研究2） 第1節 目標の共有、役割の割り振り 第2節 相互依存関係 第4章 総合考察 第1節 チーム学校として機能するスクールカウンセラーの活動 第2節 本研究の限界と今後の課題	

概要は以下の通りである。

まず第1章では、勤務回数が少ないスクールカウンセラー（以下 SC）がチーム学校の一員となる上での諸課題を整理した。第1節で、文部科学省の公立小中学校全校への SC 配置により勤務回数が少ない SC が出現した経緯をまとめ、年間1桁の勤務回数では継続的な個別面談ができないため、全校配置で、SC 活動は従来の個別面談より、職務の多様化が求められている現状を整理した。第2節では、SC がチーム学校の一員となることを考えるための理論的枠組みについて整理した。そして産業・組織心理学で集団がチームになるための4つの要件（山口，2008）を援用する方針を定めた。この4つの要件とは①目標の共有，②相互依存関係，③役割の割り振り，④境界が明瞭であること，である。さらに、勤務回数が少ない学校での SC 活動についての研究の困難さについてまとめた。具体的には、完全複式のごく小規模の学校では SC が年に一桁しか勤務しない小学校がある。このような学校は、それぞれの特性が地域により異なっているため、大規模アンケートによる調査が難しい。そこで研究方法は、申請者が SC として勤務してうまくいった事例について、インタビュー調査を行う、質的研究、当事者研究で調査することを記した。第3節では、本論の目的を明記して、全体の概要を解説した。

第2章（研究1）では、原範幸が SC として勤務する極小規模の完全複式の小学校で、初回勤務日にプランニングシート（試作版）を用いて管理職と打ち合わせを行ったら、その年の SC 活動がうまくいったという実感を持ったことから開発したプランニングシートの開発経過についてまとめた。このシートは SC が初回勤務の際に管理職と効果的な打ち合わせをすることを可能にする A3 1枚のシートである。第1節では試作版の作成について、第2節では全国の SC に関するガイドラインを調査して内容を精選したこと、第3節では完成したプランニングシートを提示して工夫した点を解説した。

第3章（研究2）では、完成したこのシートを用いて打ち合わせをした後、勤務回数の少ない SC がチーム学校の一員になれているのかを、山口(2008)の4つの指標で検討した。調査対象校は、SC の勤務回数が初年度は年6回、2年目以降は年9回である A 小学校、B 小学校の2校を選んだ。これらの学校は、同じ市にある完全複式の極小規模の小学校であった。インタビューをしたのは申請者が勤務する A 小学校では教頭と TT でソーシャルスキルとレーニンを実施した担任教師、B 小学校はスクールカウンセラーであった。

分析の方法としては、客観性を担保するため、IC レコーダー録音して逐語録を作り、KJ 法を援用してそれを分類する方法をとった。さらに、その分類を数名の第三者で確認した上で、山口（2008）のチームになる4つの要件が見られるのかを複数名で確認した。

こうして、第1節では教頭へのインタビューの分析・検討し、チームになる4つの要件の内、①目標の共有と③役割の割り振りが行われていたことが確認できた。第2節では Rousseau et al(2006) のチームワークの階層的分類を用いて第三者を含めた複数名で検討した結果、②の相互依存関係が確認できた。④はすでに自明であるため、これらの分析から、勤務回数が少なくても、山口(2008)のチームになる4つの要件が満たされていることを確認できた。

第4章では、研究の成果について第1節で3つの視点からまとめた。まず、2つの小学校での SC 活動の共通点について、A 小学校では心理教育、B 小学校では全員面接と、SC 活動としては異なっていたが、「児童全員」を対象とした予防・開発的な活動であることが共通していた。次に、学校に常駐する米国の SC 活動と本研究の共通性を考察し、勤務回数が少ない SC がチーム学校の一員となるためのステップは、「目標の共有」「教員との打合せ」「実行」「振り返り」「翌年への工夫」となると提案した。さらに、管理職によるマネジメントの視点から2校の実践を考察した結果、プランニングシートを用いた結果、管理職による SC 活動のマネジメントが行われていたことと考察した。

第2節では、今後の課題として、本研究が当事者研究である限界点と、多くの実践事例を積み重ねる必要性を述べた。

2. 審査経過

本博士論文の評価と概要は以下の通りであった。SC活動のスタートは不登校対策として始まり、年35回の勤務で苦戦している児童生徒の個人面談を担当することがその基本的モデルとなっている。他方で少子化が進む現代において、地方の学校の規模は年々小さくなっており、そのような中で始まったSCの全校配置では、拠点校方式でSCの勤務を配分するので、勤務回数が年1桁の学校が全国で1/4もあることが報告されている(文部科学省, 2022)。年1桁の勤務回数では継続的な個人面談はおこなえない。また、完全複式のような極小規模の学校では、不登校という問題は乗じにくい。これらのことから、本博士論文では、SCの全校配置が行なわれている今日、SC活動は従来型の不登校への個人面談、というモデルとは異なるSC活動のモデルが必要とされていると指摘している。

さらに本博士論文では、この問題を解決するためにプランニングシート開発している。これは、SCが勤務の初日に用いて管理職と打ち合わせを行って学校目標を共有するものである。

本博士論文では、SC活動に対する現代的な課題を指摘した点、その解決策としてのプランニングシートを作成した点が高く評価された。

加えて本博士論文では、勤務回数が1桁でも、また、SC活動の内容は異なってもチーム学校の一員になれることを示した点が評価できる。研究方法としては、当事者研究、事例研究のインタビューとなっているが、それらなるべく客観的に検討しようと、インタビューのテープ起こしを複数名でKJ法を用いて分類、その結果を心理学の理論的枠組みを用いて複数名で解析するなど、各所に客観性を持たせる工夫を重ねている点も評価できる。

文部科学省はSCやソーシャルワーカー等の非常勤職員もチーム学校の一員と考えているが、年1桁しか勤務しない非常勤職員がどうすればチーム学校の一員になれるのか、に関する研究は見られない。本博士論文では、SCに関して、現代の教育現場が抱える喫緊の問題を明確に適し、プランニングシートを用いた勤務初日の打ち合わせという汎用性のある解決策を提示した。非常勤職員がチーム学校の一員になれば学校の教育力は一層、増すことになる。本博士論文は、現代の学校教育に寄与する研究として高く評価できる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、原 範幸 の提出した論文は、博士(学校教育)の学位を授与するのにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。